

# アレシャンドロ・ヴァリニャーノの 布教の為の異文化受容

——「日本諸事要録」（1583年）、「日本諸事要録補遺」  
（1592年）を中心として——

高橋 強

## 目次

### はじめに

1. 日本人司祭の養成
  - （1）教育機関の設置
  - （2）日本人に対する見解
2. 日本語学習用書籍の発刊
  - （1）辞書及び文法書
  - （2）日本語に対する見解
3. 同宿の導入
  - （1）修道士、同宿に対する評価
  - （2）同宿の導入の意味
4. ヨーロッパ人と日本人との統一（融和）
  - （1）統一（融和）への方策
  - （2）文化対話主義への萌芽
5. むすび

## はじめに

アレシヤンドロ・ヴァリニャーノ（1539-1606）はナポリの名門貴族出身で、1566年にイエズス会に入り、インドに派遣された。東アフリカとインドの巡察師を経て1579年に日本と中国の巡察師として初来日（その後1590年、1597年来日）したが、彼の来日により日本での布教は新たな段階を迎えることになる。彼は、通信制度を改め、日本年報を作成させヨーロッパに送らせたり、インド管区に属していた日本に独立的な地位である準管区を与えたり、布教区を都・豊後・下（西九州）に分割したり、日本人司祭を養成するために教育制度を設けたりした。

本論で取り上げる「日本諸事要録」、「日本諸事要録補遺」は、元来「日本管区及びその統轄に属する諸事の要録」（1583年）、同「補遺」（1592年）と呼ばれ、どちらもヴァリニャーノによって書かれたもので、前者は第一次の、後者は第二次の巡察報告である。この報告の特徴は、在日イエズス会宣教師の最高監督者としてのヴァリニャーノが、ローマのイエズス会総長に宛てた機密に属する真正真実の生々しい報告であるという点である。松田毅一氏は「本書によって、当時の日本のキリスト教会内部の深刻な諸事情や、宣教師達の想像を超える苦悩なり、彼等が直面し、解決を迫られた日欧の風習の相違にいかに順応すべきかの問題、布教の最高方針といった宗教学的、文化史的にきわめて貴重なキリシタン史の内面を窺うことができる」（松田毅一『日本巡察記』東洋文庫229平凡社1988年12月緒論 ii）と述べ、その重要性を指摘している。

本論のテーマを「アレシヤンドロ・ヴァリニャーノの布教の為の異文化受容」としたのは、前述の「日欧の風習の相違にいかに順応すべきかの問題」を異文化受容の視点から捉え直してみようという意図からである。ヴァリニャーノは、布教の為に異文化を積極的に受容していったと考える。それ

には多くの批判が寄せられた。しかし彼は布教の為の布石を一つ一つ築いていった。彼は「布教の為」を貫く為に、日欧の風習の相違に積極的に順応していったと思うが、ただ布教の為それだけであったのか。異文化に対する興味であるとか、畏敬、賞賛（当初は驚嘆）の念であるとか、そのような部分はどうであったのか。ヴァリニャーノにとって「布教の為の異文化受容」とは何を意味するのか。

以上のような問題意識に立ち、本論では第一章「日本人司祭の養成」、第二章「日本語学習用書籍の発刊」、第三章「同宿の導入」においては異文化受容とその背景にある日本人及び日本語への見解からの分析、また第四章「ヨーロッパ人と日本人との統一（融合）」においては日本人への接し方の分析等を通して考察をすすめていく。

## 1. 日本人司祭の養成

### （1）教育機関の設置

1579年巡察師ヴァリニャーノが来日した当時、布教区域は鹿児島から九州、西日本、近畿を通して美濃・尾張にまで及んでおり、イエズス会の担当している教会は約200、日本キリシタンは15万人（10万人という数字もある）に対し、イエズス会士は84ないし85人、その内司祭は32人であった。彼は布教会議を招集して在日宣教師の意見を聞き、また豊後から京都、安土までを巡察して教会の状況を見聞し、さらに日本人の識者とも協議したうえで、日本に適応した布教方針を確立した。そして将来、日本の教会は日本人の聖職者によって維持発展されるべきとの考えから、日本人司祭を養成するためのイエズス会の教育機関を設置することを提案し、直ちに実施した。<sup>(1)</sup>

具体的には、1580年7月から1582年1月まで豊後臼杵・安土・長崎で分割開催された協議会で提議された教育に関する三議題に、ヴァリニャーノが

採決を下し実行に移した。<sup>(2)</sup>しかし、すべての宣教師がヴァリニャーノのように、日本人、日本文化のよき理解者ではなかった。2代目の布教長となったF・カブラルは、日本人に対し偏見をもち、日本文化を理解しようとせず、布教方法は根本的に食い違っていた。ヴァリニャーノは、それらの反対意見を退けて教育機関の設置に踏み切った。<sup>(3)</sup>

ヴァリニャーノは、ローマで修練院の教師を務めた経験があり、より多くの人材とそのより高度な学問的素養の育成を目指し、大規模な教育制度の編成を試みた。それは、青少年のための日本文学・ラテン文学などの人文課程を修めるセミナリオ（神学校）、修練期を終了した神学生が哲学・神学両課程を修めるためのコレジオ（学院）、そしてイエズス会士養成機関としてのノビシアード（修練院）の3つの教育機関であった。<sup>(4)</sup>

各研究機関の教育内容は大要以下のものであった。①セミナリオ：キリスト教的ヒューマニズムに基づいた広範な教養を習得すること。古典の学問と教養からなる人文学を身につけること、そしてそのために必要な語学教育と文学が重視され、ラテン語とローマ字の習得、日本語と日本の古典文学の学習が義務づけられた。さらに日本の固有の礼儀や習俗および礼法も学ばねばならないとされていた。<sup>(5)</sup>②ノビシアード：セミナリオを修了した者が、修道者としての資質を具えているかどうかを試す場。霊的書物を読み、これについて黙想し、良心を糾明し、説教の練習に努め、労働し、倫理神学を学ぶこと。<sup>(6)</sup>

ヴァリニャーノは、日本人はイエズス会に入会するに相応しい才能を有しているので、入会後修練院で2年間の修練を修了して、なおかつ能力ある者には、コレジオでの勉学の機会を与えようと考えた。③コレジオ：それは説教のために必要な日本人の教え（仏法）について学び、彼らの言葉で適切に書簡を認め、能力に従い、日本の都合に応じて文法その他の学問を学ぶためであった。<sup>(7)</sup>具体的には講義は人文課程をもって始まり、それにはラテン語と

日本語及び日本文学の二つの分野があった。その後哲学課程、神学課程が続いた。それ以外に『イソップ物語』、『平家物語』、『太平記』、『和漢朗詠集』などが講義された。<sup>(8)</sup>活字印刷機導入後においては所謂「きりしたん版」が発刊され、『エソポのハプラス』、『平家の物語』、『金句集』の合冊本や、日本の詩歌のための教科書付篇として『実語教』、『九相歌』、『雑筆抄』、『勸学文』や『太平記抜書』が加わった。<sup>(9)</sup>

教育機関特にセミナリオやコレジオにおいては、日本語や日本文学更には日本の固有の礼儀や習俗および礼法までが学習内容に入っている。コレジオの段階になると、『平家物語』、『太平記』、『和漢朗詠集』等などが講義され、かなり深い内容に触れることになる。

## （２）日本人に対する見解

ヴァリニャーノが教育機関を設立しようとするに至った背景は、彼の日本人観察があった。彼は「日本諸事要録」第一章「日本の風習、性格、その他の記述」<sup>(10)</sup>、第二章「日本人の他の新奇な風習」<sup>(11)</sup>において述べているが、要約すると次のように言うことができる。

第一は、国民は有能で、秀でた理解力を有し、子供達は我等の学問や規律をすべてよく学びとり、ヨーロッパの子供達よりも、はるかに容易に、かつ短期間に我等の言葉で読み書きを覚えるである。

第二は、服装、食事、その他の仕事のすべてにおいてきわめて清潔で、美しく調和が保たれており、ことごとく日本人がまるで同一の学校で教育を受けたかのように見受けられるである。

第三は、日本人が良い素質を備え、優れた数多の天性を保持していることは、驚嘆に値することであって、私が見たあらゆる諸国民の中では、彼等はいっしょに道理に従い、道理を容易に納得する国民である。

以上を踏まえて、彼は次のように判断している。即ち、結論的に言って日

本人が、優雅で礼儀正しく秀でた天性と理解力を有し、多くの点で我等を凌ぐほど優秀であることは否定できないところであると。

さらに第十七章「日本人は宗教に対して、いかに優れた素質を有するか。彼等の方法によっていかに容易に修道生活を行いうるか」<sup>(12)</sup>において、宗教教育、特に司祭の養成に対し日本人が、いかに適切な条件を備えているかについて述べているが、要約すると次のように言うことができる。

第一は、宣教師となるべき者の為に、主として三つのこと、即ち①その為の天分、②宗教に対する堅固な根気と強い心、③宗教上の徳操と学問に必要な能力が望まれるが、従来の経験から知り得たところによると、これら三つのすべてが日本人の中に見出されるということである。

②については、彼等は異教徒であるが、宗教に対する天性、傾向は非常に強い。

②については、彼等は子供の時から剃髪すると、直ちに生涯宗教に生きるように義務づけられたものと考え、名誉の為に、仏僧の中においても容易に堪え忍んでゆく。

③の「徳操」については、私は彼等以上に優れた能力ある人々のあることを知らない。彼等は更に、自ら感情を抑制し、愛情深く、温和で思慮あり、彼等の事物をよく考慮し、特に慎み深く、厳粛で、外面的教養に心を配り、飢餓や寒気によく堪え、厳しい環境に対してよく修練を積んでいる。

③の「学問にする能力」については、例えばラテン語に関して言うと、ラテン語は彼等にとってきわめて新しく、文がまったく反対であることや、我等の用語と最初の要素の名称が日本語に欠けている為に、我等の文法を日本語にすることは、はなはだ困難であるが、彼等が非常に敏感で、賢明で遠慮深く、かつよく学ぶことは驚嘆するばかりである。子供でも大人のように三、四時間もその席から離れないで勉強しているし、神学校では、短時間に非常に困難な日本語の読み書きと共に、ラテン語を日本文字で書いて読むこ

とを習得し、彼等の多数の者が楽器を奏したり、歌うことを学び、意味が解らなくても容易に暗唱する。ラテン文法が日本語で完全に説明され、将来、辞書その他必要な書籍が作られて、彼等がラテン語に入り始めたならば、非常に優秀な学生となり、我等と同様に、あるいはさらに短時間に進歩することは疑いない。

彼は以上を踏まえ次のような判断を下している。即ち「日本人は時と共に学問し、司祭になり、告白を聴き、ミサを読み、立派に教義を説くことができるようになるであろう。その際、彼等は日本人であり、言語や習慣を知っているので、常にあらゆる点で我等よりも優れた能力を有し、日本人から我等以上に深く愛され、尊敬されるだろう<sup>(13)</sup>」と。

なお「日本諸事要録補遺」「補遺七『要録』の第十二、第十三、第十四、第十五章について」の中で、日本人の日本文学に対する学習態度とラテン語に対するそれとを比較した部分がある。即ち、日本人は日本の文学と書物を研究し、それらで博識になりたいという嗜好が非常に強く、彼等の間で尊敬され、学者と考えられている人々は、日本の国語と書物を熟知している人々であるので、日本語を学ぶのには自らの全力を挙げて励むが、ラテン語の勉強は不承不承に、しかも強制されて行うのである。当時の実情が述べられており大変に興味深いし、ヴァリニャーノの現状認識の深さが判る。<sup>(14)</sup>

第二に、日本人の中に、修道生活を容易にならしめる諸要素を以下の4つの側面から見出している。

- ①教えられた生活方法や規則を容易に受け入れて遵守する。
- ②日本人修道士は、司祭を深く尊敬している。その点では、我等ヨーロッパの修道士達よりもさらに優れている。
- ③不平や悪口を容易に口にしないことを美德と考え、忍耐強く、数多の天性を具備し、貧困、従順、服従を我等のようには怪しまない。
- ④子供の時から神学校で強い服従と遠慮深さをもって育てられるから、幼

少時より服従することを学び、司祭に対する尊敬心をもって成長するので、イエズス会に入った後に、その生活に順応し、司祭に従ってゆくには大きい困難はないであろう。

彼はこれらを踏まえて、真実の精神が彼等の心の中に宿るならば、彼等は我等よりも優れた素質を有しているので、彼等はさらに優秀になるであろうと大きな期待をかけている。

以上の如く、ヴァリニャーノは異教徒である日本人に対し敬意を示しているが、その一方でヨーロッパ人との風習の違いに対してもその驚嘆ぶりを示している。「日本諸事要録」第一章「日本の風習、性格、その他の記述」<sup>(15)</sup>、第二章「日本人の他の新奇な風習」<sup>(16)</sup>において、日本人の善の面と悪の面の両方を挙げ、理解し難い現象を次のように述べている。

日本人は他のすべての国民とは、はなはだしく異なった儀礼や風習を有しており、まるで他のいずれの国民とも、いかにしたら順応しないかを故意に研究したかと思われるばかりである。これに関して生ずることは想像を絶する。事実日本はヨーロッパとは全く反対に走っている世界である。(略) 食事、衣服、栄誉、儀式、言語、交際、及び起居、建築、家庭内での奉仕、負傷や病気の治療、子供の教育、養育、その他すべてのことにおいて言語に絶し理解し得ないほど相違は大きく、正反対である。

高井喜成氏は、ヴァリニャーノの注目すべき点は、このように日本人を承知しつつも、それを教育を中心とする布教活動によって是正できるとした点であると述べているが、この視点から教育制度を設置したことを考えて見ると、その意義はきわめて大きいとすることができる。<sup>(17)</sup>

## 2. 日本語学習用書籍の発刊

1590年巡察師ヴァリニャーノが来日し、8月に加津佐で第二回協議会が開



催された。その際、諮問第12において、ヨーロッパ人宣教師の日本語の上達と、日本人のラテン語上達のための方法が検討された。そこでは完成度が高く、よく整理された日本語辞典を早急に作成すること、また日本語・ラテン語辞典と日本文典を編纂し印刷すること、すでに翻訳を終えていた数冊の書籍の印刷などについて結論を出し、ヴァリニャーノがこれを認めた。<sup>(18)</sup>

ヴァリニャーノは1579年に初めて来日した際に、ヨーロッパ人宣教師が日本語に習熟していない事実を知って、日本語の習得が喫緊の課題であることを認識していた。<sup>(19)</sup>従って1590年に来日した際には、活字印刷機をヨーロッパから（ゴアやマカオでも同印刷機を使ってすでに印刷を行っている）携帯した上で、前述の結論を出した。活字印刷機は加津佐コレジオに設置されて開版の準備が始まった。その後、コレジオは天草（1591年）、長崎（1598年）に移転していくが、移転先々で印刷は行われていった。なお印刷機の導入の第一の目的は、日本で日本人向けの教理書を作成し、疑念を引き起こすような異説や異端的な考え方を排除するためであった。<sup>(20)</sup>一方このような金属活字による多量の印刷出版は、庶民層への布教にも大きな役割を果たした。活字印刷機によって印刷された出版物は、1590年から1614年までに50種とも100種とも言われ、うち32種74本が現存する。

### （1）辞書及び文法書

ヨーロッパ人宣教師の為に、日本語学習関係の書籍の編纂事業は1580年代初頭に始まっていた。従って、文典と辞書の編纂と印刷は、宣教師たちの日本語学習に弾みを与え、また日本人修道生のラテン語学習にも便宜を与えた。まず1595年に天草で羅葡日対訳辞書『羅葡日辞書』が出版された。これは当時ヨーロッパで盛行していたカレピーノのラテン語辞書を基礎として、それに豊富な日本語対訳を添えたものである。この辞書は印刷に8ヶ月間を要したが、スペイン人ゴメスによれば、同国人のスペイン語学の第一人者ネ

ブリハのものにも劣らない質の高いものであった。<sup>(21)</sup>

この辞書はまた、説教のための辞書とも言われた。ヨーロッパ人司祭は説教に当たって、まず古典を参照しながらラテン語で原稿を作り、それを日本人修道生などの協力のもとに日本語に訳した。その際に利用されたのがこの辞書であり、そのために卑語も方言も含まれず、使用の日本語は文語であった。なお同年には、アノエル・アルヴァレス著『ラテン文典』に日本語の活用を併せ解説した日本語版が天草で出版されている。<sup>(22)</sup>

当時司祭の要務は、告解を聴くこと（聴罪）と説教であった。そのため、司祭にはあらゆる種類の日本語に広範に精通することが求められた。それに応えるために、日本語・ラテン語辞典の出版が急がれた。1590年代の終わりに辞書の編纂が始まり、1603年に『日葡辞書』が、翌年には「補遺」が続いて印刷された。これは、キリシタン宣教師による日本語研究の一つの頂点と評価されている。<sup>(23)</sup>

## (1) - 1. 『日葡辞書』

『日葡辞書』は1603年から1604年にかけて、長崎コレジオで印刷され、用語は日本語とポルトガル語で、書体はローマ字であった。同辞書は1595年天草で印刷された『羅葡日辞書』をもとに作成されたもので、『日葡辞書』序言の中に次のようにある。「今日は、キリスト教に対する迫害がひどくて、パアドレや日本人イルマンたちは以前よりも若干の時間的余裕が生じたので、年来不完全ながら存していたこれらの辞書（1595年天草版羅葡日対訳辞書など）を見直し、一層よく検討することができるようになった。そこでわれわれは、日本語をよく知っている者のうち何人かが、日本語に精通している数人の日本人の援助を得て、この辞書を検討増補して完成するために、数年の間精励して事に当たるようにしたのである」と。<sup>(24)</sup>日本語に精通しているヨーロッパ人が、日本語に精通している日本人と共に編纂した同辞書は、

ヨーロッパの辞書に日本の文化が吸収された形となっていて大変に興味深い。

『日葡辞書』の冒頭の全頁には、「イエズス会のパアレたち及びイルマンたちによって編纂され、ポルトガル語の説明を付したる 日本語辞書 教区司教ならびに上長たちの許可のもとに、日本イエズス会の長崎コレジオにおいて 1603年<sup>(25)</sup>」と書かれている。まさに多くのパアレ、イルマンたちの長年の研鑽の集大成であった。

本篇と補遺をあわせた丁数は402（804頁）、見出し語は、本篇25967語、補遺6831語である。両者の重複を除けば総数は32293語に達する。動詞の標出には『羅葡日辞書』の様式に準じて、語根、現在形、過去形を連記し、また『日葡辞書』は話し言葉を主体とするが故に、口語の活用に基づいていた。同辞書では、類義語や異義語・対義語を並列している<sup>(26)</sup>。

当時、日本では近畿に対して九州と関東は、著しい方言差を有する地方として知られていた。従って、九州地方を布教の中心としてきたイエズス会は、これらの地方の言葉に重大な関心を持ち、近畿方言を Cami（上）、九州方言を X.Ximo（下）と標して取り扱い、上（ミヤコ・都）に対比させた九州方言について指摘している。方言注記のあるものは465語、その大部分は下地方の語が占める。その6割以上は名詞で、動詞は約100語である<sup>(27)</sup>。

卑語については、B（Baixa 下品な）などで注記し、卑語な語であることを明示した例は約90である。方言や卑語は言語の性格に基づいて宣教師の使うべきでない言葉とされた。また宣教師の立場から避けるべき特殊語の一つは、女性語（Palaura de molheres）で、約110語に注記がある。その多くは女房詞と呼ばれるものである。仏法語については、当時仏教はキリスト教と対立関係にあったので、慎重に対処している。明確な仏教用語については採らない方針であったが、一般に通用している仏法語 Bup.（Buppo）と注記して約150語取り上げている。その他に、文書語主として漢語、また詩

歌語主として和語などの注記がなされている。<sup>(28)</sup>

同辞書の特色の一つとして、前述した如く方言、卑語、女性語、仏法語等の豊富さが挙げられる。これらを通して、日本の都に対する地方の存在や、社会の暗部や、社会の一方を支える女性の存在や、日本人の行動様式を支える規範等、日本の社会文化を広範囲に吸収している。

## (1) - 2. 『日本大文典』

『日本大文典』は1604年から1608年にかけて長崎コレジオで印刷され、用語は日本語とポルトガル語で、書体はローマ字であった。『日葡辞書』(1603～1604年長崎印刷)と同時に企画され、それぞれ分けて編集が開始されたとも言われている。<sup>(29)</sup>

同文典はジョアン・ロドリゲスによって編纂されたもので、三巻印刷された。第一巻は動詞など屈折論、品詞論、第二巻は文章論、修辞論、第三巻は文体論、人名論、計数論等である。アルヴァレス著『ラテン文典』(1595年印刷)を規準とし、文法的範疇や文法の基本的概念についてはアルヴァレスの学説用語を遵守しながら、文法現象はあくまでも日本語の事実を尊重する態度を堅持し、ラテン的と日本的との二元的立場に立ったものである。ロドリゲスはラテン語の文法的範疇では処置しがたい事象があることを認めて、その文法的事実を日本語の「表現法、言い方」と呼んで随所にその具体例を挙げて示した。また、彼は日本語の系統的分類に及んで、固有語を「よみ」、<sup>(30)</sup>字音語を「こえ」と呼び分けている。

他方ロドリゲスは、敬語や人名に付する尊称、呼称が非常に発達していること、特殊な接続法のあることなどを述べて、言語的優秀性も示している。<sup>(31)</sup>なお敬語に関しては、敬語を、相手や話題の人物の身分の高下に応じた語の使い分けによる尊敬、丁寧の表現であるととらえ、さらに敬語表現と対蹠的な見下げや軽蔑表現についても言及している。彼が待遇表現を重視している

ことがわかる。彼がもう一つ重視していたのは、書状における書き言葉である。同文典のなかで「書状に於ける書き言葉の文体は、簡潔という点においても、又助詞や成語の特有なものがある事に於いても、他の書き言葉とは大いに違っている」と指摘している。厳格な身分制、面子や儀礼を重んじる社会では、古文書の書き方、読み方は、一段高い言語能力として評価されていると考えていたからであろう。<sup>(32)</sup>

同文典は、単なる文法書ではないと評価される。それは、本来の言語学的な価値以外に、「標準語と方言の発音法」、「話し言葉と書き言葉」、「書状の礼法」、「人名論」、「数詞の用法」、「計数論」（主として第三巻）といった、日本語の極めて多方面にわたる有益な情報が含まれているからである。当時、日本の首都であつた京都で話されていた標準語と、布教活動の中心地九州の方言の間には、著しい相違があり、この事実を重要視したロドリゲスは、数章をこの問題に充てた。宣教師たちが、京都の公家の言葉も、九州の一般庶民の言葉も理解できるようにとの配慮である。ロドリゲスはまた、日本の詩歌の概説をしたり、『平家物語』（90例）、『イソップ物語』（40例）、『論語』（40例）を引用したり、さらには日本の地理と歴史に関する数章も収めている。<sup>(33)</sup>

## （2）日本語に対する見解

ヴァリニャーノは「日本諸事要録」第二章「日本人の他の新奇な風習」において、以下のように日本語に関して述べている。

「彼等のことごとくは、ある一つの言語を話すが、これは知られている諸言語の中でもっとも優秀で、もっとも優雅、かつ豊富なものである。その理由は、我等のラテン語よりも（語彙が）豊富で、思想をよく表現する（言語だ）からである。同じ一つのものを意味する名称が数多くある。上に、彼等の名誉を重んずる優雅な天性により、すべての人、及びすべての事物に向

かつて同一の名詞や動詞をもってすることは許されず、対応する相手の人物や事物の階級に応じて、高尚、低俗、軽蔑、尊敬の言葉を使いわけなければならない。口語と文語は異なるし、男女は非常に異なった言葉を話す。書く言葉の中にも少なからぬ差違があつて、書状と書物とでは、用語が異なる。つまり、これほど種類が多く優雅であるので、それを習得するのは長期間を必要とする。彼等の慣わしとなっている言葉と異なる話し方や書き方をすれば、嘲笑と侮蔑的となるのであり、それは我等がラテン語で言葉を逆にし<sup>(34)</sup>たり、格を誤ったりするようなものである」。

さらにヴァリニャーノは自著『日本におけるキリスト教の起源とその発展』の中で次のようにも述べている。

「(中略) その他にも敬意を持った助辞や動詞を使わないで儀礼を表す方法がある。それは第一人称を自身で使うのには如何なる場合も常に普通の語か卑下した語かを使って、話さねばならない。そうすることによって、敬意を持った語は他人を尊敬するためにのみ使われることになるのである。また、話題とする人や事物に応じて、敬意を持った語や助辞を使わねばならない。話し相手とする人ばかりでなく、話題とする人や事物について敬意を示すのであつて、それらに応じて、普通の動詞か敬意を持った動詞かを使わねばならないのである。かくして日本語は、その性質上、言語そのものが礼儀と立派な躰とを人々に教えるのである」<sup>(35)</sup>。

ここにヴァリニャーノの日本語観が表現されている。一つには、日本語の最大の特徴は敬語の発達であるということ、二つ目は、日本語は豊富で優雅であるが、一方敬語が複雑であり、口語と文語、あるいは男女間の違いなどがあつて、習得が容易ではないということ、三つ目は、敬語は礼儀・作法を含めた振る舞いとしてトータル的に捉えなければならないことである。<sup>(36)</sup>

ヴァリニャーノの日本語特に「敬語」に対する関心は、やはり「布教の為」という目的がその背景にあるように思えるが、それを通して「日本語は

豊富で優雅である」と捉える点からは畏敬の念や賞賛といったものが読み取れる。また日本語は「礼儀・作法を含めた振る舞い」と捉える点からは、彼の学者としての関心さえも読み取れる。

前述の教育機関において、広範な教養を身につける為にまた布教の為に日本語を学習する点を指摘したが、ヴァリニャーノは「日本諸事要録」第十四章「イエズス会に受け入れるべき日本人、並びにその試練と教育法」、第十六章「日本人修道士、及び同宿と、我等ヨーロッパ人宣教師の間に統一を維持する為の十分な注意と方法」において、ヨーロッパ人にまして日本人が日本語を学習するもう一つの意義を次のように述べている。

「日本語は、きわめて優雅であり豊富であって、話すのと書くのと説教するのは、それぞれ言葉が異なるし、貴人と話す場合と下賤の者と話す場合では言葉を異にする。このような多様性は、漢字の上にも無数あって、書くことを学ぶのは不可能であるし、人に見せられるような書物を著すことができるようになることは、我等の何びとにも不可能である。（中略）彼等は日本語を書いたり話すことをすべて知っており、その土地の出身者として、これを深く学び練習することができる。これは外国人である我等の何びとにも到達できないことで、我等はいかに学んでも、言語に関しては彼等に比べると子供のようであり、書くことを知り、著述はおろか書物をよく理解することさえ到達できない<sup>(37)</sup>」と。

ヴァリニャーノは極めて客観的に日本語を観察しているが故に「外国人である我等の何びとにも到達できない」と述べているのであろうが、彼の人間性の一端である謙虚さや正直さも表れている。なおヴァリニャーノ自身と日本語学習との関係について、村田昌巳氏によると、哲学や神学を学んだ学生時代よりも熱心に日本語学習に取り組んだという分析結果があるが、大変に興味深い<sup>(38)</sup>。

### 3. 同宿の導入

#### (1) 修道士、同宿に対する評価

日本人が宗教に対していかに優れた素質を有するかについてはすでに述べた。それでは実際に信仰実践に関してはどのように見ていたのであろうか。ヴァリニャーノはそれらについて、信仰実践を行っている日本人修道士や同宿を通して一つの見解を述べている。彼は「日本諸事要録」第十四章「イエズス会に受け入れるべき日本人、並びにその試練と教育法」<sup>(39)</sup>、第十五章「同宿とその性格、並びに日本においてこれを欠くことを得ない理由」<sup>(40)</sup>において述べているが、要約すれば以下のように言うことができる。

第一に、彼等（日本人修道士や同宿）は日本語を書いたり話したりするすべてを知っており、その土地の出身者として、これを深く学び練習することができる。更に彼等は、キリスト教徒に必要な書籍を翻訳することができる。今まで著されたものは、すべて日本人修道士の手によるものである。

第二に、我等と日本人は、その習慣、生活態度をはなはだしく異にし反対とするから、同じ日本人を仲介としなければ、仏僧達のように必要な心の融和や、親睦、権威を獲得できない。日本人はイエズス会に入会し、今日まで外国人の宗教と思われないように、日本人に合致した自然な方法で行っている。

第三に、イエズス会は日本人修道士の手によらねば、確乎たる根を日本（の社会）に下ろさなかったであろうし、その生活に必要な収入も手段も得られなかった。

第四に、修院で育てられた同宿は、カトリック要理を教えたり、説教したり、あるいはその他の仕事をするのに役立った。彼等は、日本の習慣や生活方法を知らない司祭に代わる説教者であり、司祭の案内人となっていた。深い精神生活に到達する方法も機会もなかったが、それにもかかわらず、彼等



は期待しうる以上の大いなる成果をあげた。彼等は、言語を知っているから、司祭よりもその説教においてははるかに優れ、日本人は彼等の説教の方を喜ぶので、彼等がいるところでは、司祭は稀に説教するだけであった。

ヴァリニャーノは何度も「同宿」という言葉を使い高い評価を与えているが、ここで言う同宿とはどのような者なのであろうか。同宿とは将来僧侶になる為に、僧院の中で育てられた若者であり、頭髪を剃り、僧侶と異なっているが、同様に長衣を着用していた。当時、同宿は仏僧の間では低い階級であるが、ある手段によって修練中で、僧侶になることを希望しており、宗教家として認められ、大いなる特権を有し重視されていた。

当時、イエズス会の教会には大勢の同宿がいた。イエズス会の修道士でないことは周知のことであるが、彼等の中の多数の者は、修道士になる為に育てられていた。日本人の間では評判が良いので、修道士が不足している為に、宣教師のもっとも重要な仕事すら手伝っていた。多くの司祭達は彼等を頼りとしており、彼等を徳操に導くよう努力もしていた。

同宿は通常、誓願を立てていない（この点が修道士との決定的な違い）し、イエズス会に対するその他の義務を有しないが、司祭が適当であると考えた場合には、イエズス会に入会の誓願を立てる許可を与えられる者もある。彼等は（教会を）出たい時には出ることができるし、司祭も自分達の考えだけで、誰にも相談せずに彼等を修院から出すこともできた。しかし同宿は、司祭にとってきわめて有利、かつ必要であり、彼等がいなければ司祭は日本で何事もなし得ないのも現状であった。教会の世話をし、司祭達の為の交渉の文書を取り扱い、茶の湯の世話をするのも彼等であった。

## （2）同宿の導入の意味

同宿は、本来仏教用語の同宿に由来している。前述の如く、イエズス会士によると、同宿は寺院で僧侶に仕える若者または剃髪した者で、俗世間か

ら離れ、人々から宗教家と見なされていた。当時、イエズス会の教会やイエズス会の教育機関にも、これと同様の同宿が大勢いて、彼等の中の多数の者は、修道士になる為に育てられていた。日本人の間では評判が良いので、修道士が不足している為に、宣教師のもっとも重要な仕事すら手伝っていた。即ち、仏教用語の同宿が、イエズス会に導入されていたのである。<sup>(41)</sup>

同宿という用語がイエズス会関係の史料で最初に出てくるのは、1580年にヴァリニャーノが記した「上長のための規則」とされており、彼が用語の導入に関係していたと言われる。ヴァリニャーノが、日本の習慣や礼儀作法に自分たちを適応させるという「順応方針」を採用した結果である。この用語が導入される以前から、イエズス会士に同伴して協力した日本人は存在していた。例えば、山口の琵琶法師であったロレンツはザビエルに同伴し、通訳や説教を行っていて、こうした者が同宿の原型となっていたと言われる。<sup>(42)</sup>

「順応方針」に沿って同宿を導入したのであるが、それに対してはイエズス会の中から否定的な意見も提起された。同宿は本来イエズス会に見られないものであるため、同会の遵守すべき行動様式に反するものであるとの批判である。これに対してヴァリニャーノは、同宿の必要性を強調し導入せざるを得ない現状を述べて反論している。<sup>(43)</sup>

なお（仏教の）同宿については、仏教の視点からは次のような評価がなされている。即ち、時代を遡る初期の段階では、仏道を求める純粋な僧であったと思われるが、次第に寺社の雑務をしながら生計を立てる半僧半俗の下級坊主となっていた。しかしそれは、庶民との触れ合いを生み出し、仏教の浸透化へ大きく貢献したことも忘れてはならない。<sup>(44)</sup>この視点は、イエズス会の同宿が日本人の間で評判がよいとか、彼等の説教を喜んでいる等とから考えると、キリスト教の庶民への浸透化に少なからず貢献があったと考えていいように思える。

それでは同宿の存在をどのように考えればよいのであろうか。森脇優紀氏

は次のように述べている。

「このようにドウジュク（森脇氏は仏教における用語の同宿と、キリスト教における用語をドウジュクと区別している）は、イエズス会の会員ではないがイエズス会士と共に生活をしており、会が当然守るべき行動様式に当てはまらない日本の『特殊事例』であった。そしてその主な役割は、イエズス会士と生活を共にし、教理教育や説教、ミサや洗礼の補助をすることであった。しかしその一方で、彼らはイエズス会士ではなく、聖職者でもなかった。つまり、ドウジュクは『聖』の存在であり、かつ『俗』の存在でもあったのだ。そして同時に、守るべき行動様式がある一方で、必要性からその特殊性を認め、それに適応せざるをえなかったというジレンマを、イエズス会の中に生み出すこととなったのである」<sup>(45)</sup>。ここで述べている「特殊事例」その捉え方自体が、すでに相対的な見方に立っており、なおかつそこに「聖」と「俗」の側面を見出した点に特に注目したい。この視点はヴァリニャーノの「適応主義」に関する議論に有益な視点を提供しているからである。

近年イエズス会が「適応」を「道具」として用いたと論じ、その視点を強調するレンゾ・デ・ルカは「今までよく使われてきた『適応主義』という表現は、宣教師たちが文化交流を宣教手段としていた要素が薄れる」との考えのもと、「宣教道具」という表現（新用語）を提案している。この見解に基づくと、ヴァリニャーノの順応方針に沿って導入された同宿は、宣教道具ということになる。確かに、現実的な必要性から高く評価をして導入したという側面はあるが、狭間芳樹氏も言うように「一方で非西洋世界を野蛮と斬って捨て現地文化を絶滅して恥じない大航海時代にあって、ヴァリニャーノのこの視点が卓越したものであったことも忘れてはならない」<sup>(46)</sup>。ここでもう一つ重要な視点は、同宿の有する「聖」と「俗」の二面性であろう。即ち、もし同宿の中に「聖」の側面を認めていたならば、宣教道具という表現は相応しくないように思われる。

またヴァリニャーノの「適応主義」に関しては、高瀬弘一郎氏も「ヴァリニャーノは自他共に認める適応主義の旗手と評されるけれども、その実、彼の日本理解には限界があったと言わねばならない。日本の実情により深く踏み込んだ“適応”と言うなら、それはむしろ、ヴァリニャーノの後継者たるフランチェスコ・パシオによって実行に移されていったと言ってよい」、「パシオによって行われた喜捨受納に関する規定の改変は、宗教性のある事柄に対する適応という観点から取り上げることのできる、ほとんど唯一と言ってよい事柄」であると指摘し、ヴァリニャーノの“適応”は宗教的習俗以前の段階の適応であると捉えている。<sup>(47)</sup>

これに対して狭間氏は、「宗教性のある事柄」という場合の「宗教性」と「非宗教性」、換言するなら、聖と俗との二分化については現代宗教学において議論を要する問題でもあり、パシオ以前の適応が「宗教的習俗以前の段階」であるか否かについては検討の余地が残されているように思われる、と述べているが傾聴に値する見解である。前述の同宿の導入一つ取り上げても「聖」と「俗」の二面性を有しているからである。<sup>(48)</sup>

## 4. ヨーロッパ人と日本人との統一（融和）

### （1）統一（融和）への方策

ヴァリニャーノは、日本の布教事業を前進させる上で、多くの困難があるが、その最大のものは、日本人修道士及び同宿と、ヨーロッパ人宣教師の間に統一（「日本諸事要録」では“統一”という言葉を使っているが、内容からするとむしろ融和の方が適切であろう）を維持することであるとの現状認識をもっていた。そこで統一の課題に関して、「日本諸事要録」第十六章「日本人修道士、及び同宿と、我等ヨーロッパ人宣教師の間に統一を維持する為の十分な注意と方法」<sup>(49)</sup>、第十八章「日本人を統轄する為に採用すべき

方法」<sup>(50)</sup>の中でその方策を述べている。要約すると次のように言うことができる。

まず彼は統一がない場合の主たる4つの弊害を挙げている。

第一は、統一がないところでは、一切のものは破滅する。

第二は、彼等が居なければ、我等は日本で生活することも、何をするともできないのであるから、彼等が多数我等の修院に入って来て、もし不統一に生活するとなると、いかなる結果になるかは明白に想像される。

第三は、将来彼等が学んで司祭になった時に、その多数の者が我等やイエズス会に対して、彼等の思う通りに行動することは疑いない。

第四は、我等が彼等に同調し、彼等が我等に同調しなければ、精神的な融合はあり得ず、それなくしては、日本の存在する数多の悪徳に関する危険や機会を克服する力をもつことができないので、イエズス会は簡単に破滅するだろう。

彼はまず弊害を挙げた上で、次に統一を維持する方策を5点に分けて提起している。

第一は、イエズス会に入る日本人を、あらゆる点でヨーロッパ人修道士と同様に待遇し、同宿もその身分に応じて同様に扱う。なぜなら、イエズス会の内部において、修道士の待遇上の不平等ほど統一と兄弟愛を破壊するものはないからである。

第二は、イエズス会の会則に応じて、温和と愛情をもって日本人を待遇し、統轄し、徳操と宗教的贖罪を教えるよう努力する。そして全て彼等の幸福と利益の為に努力していることを理解させる。

第三は、我等の規則を厳格に遵守し、日本人の習慣、儀礼、感覚に悪い感情を抱いたり悪口を述べたりしてはいけない。

第四は、日本人の習慣、儀礼、態度、挙動は最上のものなので、我等がそれらを習得し、喜んで遵守してこそ、最大の統一と最大の結果が得られる。

主なる神の愛により、我等は日本人に援ける為に、郷里を棄て、幾多の苦勞を経て來たのであるから、我等が日本人に順應するのを嫌うことによって、成果や事業を破壊させてはならない。

第五は、我等はヨーロッパ人の嗜好を放棄し、自らを制して彼等の嗜好に合わせ、彼等の食物に適応しなければならない。

彼はさらに上長に対しても、日本人を統轄するに際しての三つの努力目標を提起している。まず第1点目は、修道士も同宿もイエズス会を愛し、我等の修院で喜んで生活するようにさせること。そしてその為には、ヨーロッパの諸条件や態度、行為によって彼等を導こうとはせずに、彼等の条件なり方法によって待遇することが必要である。だから当初は深い愛情をもって優しく待遇し、常に温和、かつ鄭重に話し、彼等を訓戒し譴責する場合にも、怒って礼を失した言葉で物を言うことを慎まねばならない。

彼等は怒りを抑制することを大きい誇りとし、激昂して発した侮辱的な言葉には当然堪えられないので、上長が侮辱的な言葉を修道士に用いると、彼等は悲しみ、その上長を教養なく、徳の低い、下級の人物と見なすことになる。彼等は天性正直で、面目を重んじるから、上記のような行為は彼等の心を害すが、彼等を信頼と名誉をもって遇するならば、良き授けとなる。

衣食、その他必要な物の取り扱いについても十分な注意を払い、日本の習慣に従って（最高の適応）、清潔にせねばならない。必要な場合には、十分彼等を処罰せねばならぬ。しかしすべてこれは、感情によって対処していると思われるような方法ではなく、彼等自身の利益と他の人々の幸福の為であると思われるようにし、まず道理によって納得させ、彼等自身の中に、そのような処置を受ける理由があることを知らさなければならない。

第2点目は、精神を体得させ、徳と學問に進歩させるようにすること。そしてその他さらに進歩の為に採らねばならない方法は、彼等が心を触れ合いたいと考えることについては、ことごとくこれを教え、説得することであ

る。彼等は生来その性格は萎縮的で隠蔽的であるから、心を触れ合おうという気持ちを起こさせ、納得せしめることが必要である。もし彼等を深い愛情、温和、思慮をもって待遇せず、この心の融和を容易にしなければ、彼等は萎縮して、私達にはその胸中が理解できないまでになり、それが為に彼等はほとんど進歩しないようになる危険がある。（中略）苦行の真の方法は、自身が苦行し、欲望を抑制することを望むように人々の心を動かし、納得せしめることである。この方法については、前述の通り、日本人は道理によって統轄し教育することが必要である。

第3点目は、ヨーロッパ人の我等を愛し、我等と十分に統一を保って生活するようにさせること。我等が日本人の風習に従うならば、彼等は直ちに我等に同調し、彼等は我等に愛情を抱くようになるだろう。従って、この点において欠如する危険があるとすれば、彼等の側よりは、むしろ我等の側である。すなわち、彼等はいかなることにしても、その風習は放棄しないのであるから、すべて我等の方から彼等に順応せねばならず、それは日本では必要なことであり、我等は大いに努力せねばならない。ある場合には彼等は天性までも変え、大いなる苦しみによってそれをなすのであるから、この統一のために必要なことを行う困難は、我等の側にあって日本人の側にはない。

以上のことからヴァリニャーノの基本的な態度は、以下のようにまとめることができる。即ち①平等な立場に立つこと、②温和と愛情をもって接すること、③日本人の習慣、儀礼を尊重し学習しそれに適応させること、④融和を実現させる為に、ヨーロッパ人が日本人に同調し、それを通して日本人の同調を引き出すこと。

このヨーロッパ人と日本人の統一の問題は、ヴァリニャーノが来日する前からすでに発生していた。2代目の布教長となったF・カブラルは、日本人に対し偏見をもち、日本文化を理解しようとせず、布教方法は根本的に異なっていた。ヴァリニャーノは日本布教の状態とカブラルの態度を以下の7

項目にまとめている（1595年の書簡<sup>(51)</sup>）。

第一に、カブラルは日本人修道士の指導方法に関しては、彼等は自尊心の高い国民であるから、厳格に取り扱わねばならないとして、彼等を黒人で低級な国民と呼び、他の侮辱的な表現を用いた。彼はしばしば彼等に向かい、「結局のところ、お前達は日本人である」と言うのが常で、彼等に対し、彼等が誤った低級な人間であることを理解させようとした。かかる態度を日本人は極めて嫌悪した。

第二に、日本人修道士は、ポルトガル人修道士とまったく異なっており取り扱われ、彼は彼等がヨーロッパ人修道士のような衣服や帽子を被ることを望まず、食事、睡眠、その他総てのことで異ならしめた。かかる待遇が彼等とヨーロッパ人の間に不一致を招来した。

第三に、彼は日本人を我等の習慣に、そしてポルトガル人を彼等の習慣に順応させるべきではないとした。彼によれば、彼等は黒人であり、まったく野蛮的な風習を持っているというのであった。彼はその後も、日本の風習に順応せず、高い机で食事をし、テーブル布やナフキンを使用させたが、それらははなはだ不潔であった。日本人は食堂、台所で清潔を好むので、彼を不潔と見なし、嫌悪した。

第四に、彼は日本の風習を常に親しめぬものとし、これを悪し様に言った。彼の周囲も日本の風習を嘲笑し、自らの風習を優れたものと見なしていた。これは日本人を立腹させた。

第五に、彼は日本人修道士が、ラテン語やポルトガル語を覚えることを許さなかった。ポルトガル語の学習を許さないのは、ヨーロッパ人の会話が判らぬよう、我等の間の秘密が覚えられぬようにする為であった。ラテン語を習わせないのは、彼等に学問をさせず、彼等の中から司祭になる者が出ないようにする為であった。

第六に、彼は日本人には大いに悪徳に走る傾向があるとして、日本人の為



の神学校を作ることを決して許さなかった。

第七に、彼は日本語を、我等が良く学ぶことのできない、また文法によっても判らないものとし、日本語で説教することは縁遠いものと考えた。事実、彼は布教長として13年間過ごしたが、ほとんど学ぼうとしなかった。また彼は、人々が文法によってそれを学ぶように配慮しなかった。

以上を通して見えてくるカブラルの基本的な態度は、次のように言うことが出来る。即ち、日本人に対する偏見（その風習は野蛮的、或いは劣っている）から、日本人は低級な国民、ヨーロッパ人は優れた国民と見なし、それが故にヨーロッパ人と異なる扱いをし、日本の風習にも順応しようとせず、日本人から司祭が出ることを望まなかったので、日本人に学問をさせず、ラテン語の学習もさせなかった。

高井喜成氏はこのカブラルとヴァリニャーノの態度を比較して次のように述べている。即ち、カブラルの方針は、自己の保持するヨーロッパ感覚的尺度で日本布教、もしくは日本の風習等を洞察しており、日本人を下に観る形のもので、彼の方針は「同化的方針」であると言えよう。一方、ヴァリニャーノの方針は、日本のように「異質な世界」で、他者に歩調を合わせることを嫌う国民の中にあって布教するためには、その国民の生活方法・習慣・言語等を習得して、その社会の風土・文化に順応する方法で布教することを考えたことから、順応的方針<sup>(52)</sup>と言える。

さらに、井出勝美氏の見解を借りれば、「カブラルその他のパードレが、日本人の好ましからざる性格を天性のもの natural 即ち、スコラ学の用語を借りて表現すれば、本質的なもの *Essentia* と見なしたのに対し、ヴァリニャーノは、それは本質的なものではなく、偶性的なもの *Accidentia* つまり何らかの歴史的条件下に形成されたもの、従って暫定的、矯正可能なものと信じた点にあった」と言うことになり、その両者の相違は明確であった。<sup>(53)</sup>

カブラルとヴァリニャーノの日本人にたいする見解の相違は、マカオにコレジオを創建（1594年）する際にも表面化した。ヴァリニャーノは日本人司祭の養成の為に、マカオにコレジオを創建する計画を立てた。それには当初から多くの反対意見があった。その諸理由を「ゴアで開催されたパードレたちの協議会において、イエズス会のコレジオをマカオに創建すべきでないとされた諸理由」（1594年頃と推定）に基づいて整理すると次の4点にまとめられる。1点目は経済基盤の問題、2点目は人材不足によりマカオ独自で維持できない、3点目は日本人の国民性及び資質の問題、4点目はマカオでは教育の効果が期待できない、の4点である。高瀬弘一郎氏は主たる理由は2点目と3点目であると述べているが、3点目の反対理由は整合性がないと結論付けている。なぜならば、その主張を貫くならば、日本人のためのコレジオを創建すること自体一切反対ということになるからである。また高瀬氏は、上記協議会は東インド管区長カブラルの主導下に開催され、彼の意向に沿って結論が導き出されたものと判断してよいと考えている。ここでも両者は鋭く意見が対立している<sup>(54)</sup>。

## （2）文化対話主義への萌芽

前述のカブラルとヴァリニャーノ両者の日本人や日本の風習に対する態度の違いは、まさに「自民族中心主義」と「文化相対主義」の違いを想起させる。カブラルはヨーロッパ感覚的尺度を中心として、日本人や日本の風習に優劣をつけるが、ヴァリニャーノは日本人の習慣、儀礼を認め尊重し学習しそれに適応させ、さらに日本人との融和を実現させる為に、ヨーロッパ人が日本人に同調し、それを通して日本人の同調を引き出そうと努めている。

ヴァリニャーノが立脚していると考えられる文化相対主義は、自身の文化が最高であるとする「自民族中心主義」を克服しようとして生まれた概念で、諸文化に対して、自身の文化を中心に優劣をつけるのではなく、相対的

に多様性を認めることが必要であると主張する。<sup>(55)</sup>しかし、同主義には以下の問題点が指摘されている。<sup>(56)</sup>①単に「相互に文化を認める」に留まるならば人間の絆を分断する差異と働く一面を払拭できない。②認識的な「消極的寛容」では、対立発生時には吹き飛んでしまいがちな脆弱さを払拭できない。③自己の集団のみを絶対視する閉鎖的「排他主義」を払拭できない。④人間の積極的な意志が伴っていないために、文化の違いが自民族中心主義に転化する危険性をもつ。これらの問題点に関してヴァリニャーノの場合は、彼は日本人や日本の風習に対しまずそれを認め尊重し積極的に順応し、布教の為に積極的に活用していった点から考えると、むしろ文化相対主義がいい方向に働いていったものと考えられる。

近年、この文化相対主義の問題点を克服しようと新たに「文化対話主義」が提唱されてきた。同主義を提唱している池田大作氏は次のように述べている。「これからの人類は、互いに敬い、学び合いながら、共に繁栄しゆく大同の世界を目指していくべきである。そのためには、開かれた自発的な交流を旨とする『文化対話主義』ともいうべき新しい段階へ、進んでいきたいと思う」と。<sup>(57)</sup>

同主義は、池田氏が杜維明氏との文明対話の中で提起されたものであるが、その際、杜氏は同主義を構成する一つの要件として「自発的な参加者」を挙げている。杜氏はその具体的な内容を次のように述べる。「創造性ある『調和』を創り上げるためには、関連する当事者たちが、相互理解と相互援助のための共通の基盤を構築する、協力的な大事業における『自発的な参加者』にならねばならない」と。<sup>(58)</sup>この第一の要件に関して言えば、ヴァリニャーノはヨーロッパ人と日本人との融合を図ろうとし、しかも布教の為に使命感に立っており、「自発的な参加者」そのものと言うことができる。

池田氏はさらに二つの要件を挙げている。その一つは「創造的対話」である。池田氏は「敵と見方」や「善と悪」といった二元論による分断化が引き

起こした諸問題を克服する為に、仏法の「善悪不二」の視点からの克服を試みて、次のように述べている。即ち「仏法では『善悪不二』といって、すべての人間の生命には、潜在的に『善悪』の両面が具わり、縁に触れて善にも悪にも転じると教えている。ゆえに、自他共に、内なる『悪』の発現を抑え、『善』を薫発しゆく、生命の練磨作業こそが、創造的な『対話』の真の姿である」と。<sup>(59)</sup>ここにおいては、「善悪不二」に基づいた、自他共の生命の練磨作業を通して、創造的な「対話」を形成しようという提案が読み取れる。

それでは、具体的にどのようにすれば、内なる「悪」の発現を抑え、「善」を薫発しゆくことができるのであろうか。これに対し池田氏は更に次のような示唆を与えている。①自己を省みながら、相手の善性を信じて呼びかける、このような「対話」を通して、まず自己を統御し規律する力を練磨する(自己の変革)、②そしてそれを通して相手の善性を引き出していくということである(相手の変革)。<sup>(60)</sup>この第二の要件に関しては、ヴァリニャーノの以下の態度、即ち、「我等が日本人の風習に従うならば、彼等は直ちに我等に同調し、彼等は我等に愛情を抱くようになるだろう。従って、この点において欠如する危険があるとすれば、彼等の側よりは、むしろ我等の側である」は、池田氏の言う「創造的対話」と言うことができる。

もう一つの要件は多様性を活かす「精神のグローバル化」である。これは「自発的参加者」が寄って立つ精神土壌とも言うことができる。具体的には①縁起的発想、②アイデンティティーの多層化を挙げている。

①縁起的発想：縁起観に立つと、いかなる物事もたった一つだけで成り立つということはなく、すべては、互いに依存し、影響し合って成立することになる。池田氏はこの考え方を発展させて「この発想からは、人を排斥するという考え方は生まれない。むしろ、他者をどう活かすか、よりよい人間関係をどうつくり、いかに価値創造していくかという思考に立つはずで

ある」と述べている。<sup>(61)</sup>この点に関しては、ヴァリニャーノが同宿を導入したことに顕著に現れている。同宿の果たしている貢献を認め、彼等の役割、即ち説教や司祭の案内役等を最大限に役立てていった。

②アイデンティティーの多層化：池田氏は牧口常三郎の「郷土民」「国民」「世界民」思想（一人の人間はこの3つの自覚を併せ持つべきである）に触れながら、「人間のアイデンティティーを『民族』や『人権』などの特定の観点から限定するのではなく、多元的な視点をもってアイデンティティーの視野を広げていく。そして、同じ『人間』という共通の土台に立って、共に『良き隣人』『良き市民』『良き地球人』として生きてゆくこと」の重要性を強調している。<sup>(62)</sup>この点に関しては、ヴァリニャーノの次の言葉の中に反映されている。即ち、「主なる神の愛により、我等は日本人に援ける為に、郷里を棄て、幾多の苦労を経て来たのであるから、我等が日本人に順応するのを嫌うことによって、成果や事業を破壊させてはならない」から考えるに、彼のアイデンティティーはすでに多層化していると言って過言ではない。

## 5. むすび

ヴァリニャーノは日本人司祭養成の為に、セミナリオやノビシアードやコレジオといった教育機関を設置し、教育内容の中に異文化である日本文学、例えば『平家物語』、『太平記』、『和漢朗詠集』や日本語も取り入れた。さらにヨーロッパ人のイエズス会士に日本語の学習を勧め、その為の『日葡辞典』や『日本文典』そして日本語学習用のテキスト『平家の物語』、『金句集』等も準備している。

布教にとって大きな役割を果たしたと考えられる異文化受容は、同宿の導入であろう。イエズス会として遵守すべき行動様式がある一方で、必要性からその特殊性を認め適応せざるを得なかったという矛盾を抱えての導入で

あった。従って「聖」と「俗」の共存する特殊事例を受容したことになると言っても過言ではない。

これらの異文化受容は、「布教の為」という宗教的使命感以外に、ヴァリニャーノの日本人や日本文化にたいする態度が大きく影響したと考えられる。当初はヨーロッパと全く正反対の様相に驚嘆するが、次第に関心や興味を示し、更には畏敬の念に変わり賞賛するに至っている。『日葡辞典』や『日本文典』発刊は布教の為だけでなく、日本人及び日本文化という異文化に対する所謂学者としての好奇心もその背景にあったと考える。同宿の導入について言えば、彼等の働きに対する大きな評価さえも現れている。

ヴァリニャーノの異文化受容は、まず異文化を認め、畏敬の念をもち尊重さえもし、その上で積極的に受容し、結果的に新しい価値の創造に繋がっていった。その態度の中には「文化対話主義」の萌芽さえ見受けられる。

#### 注

- (1) 『新カトリック大事典』研究社1998年1月 p413、p441
- (2) 五野井隆史『キリシタンの文化』吉川弘文館2012年7月 p104
- (3) 『新カトリック大事典』前掲 p413
- (4) 『新カトリック大事典』前掲 p413
- (5) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 pp115-116
- (6) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 pp118-119
- (7) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 p105
- (8) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 pp123-124
- (9) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 pp131-132
- (10) 松田毅一『日本巡察記』東洋文庫229平凡社1988年12月 pp 5-14
- (11) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp15-27
- (12) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp96-99
- (13) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp93-94
- (14) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp227-228
- (15) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp5-14

- (16) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp15-27
- (17) 高井喜成「キリシタン布教活動についての一考察」『佛教大学大学院研究紀要』第11号1983年3月 pp83-84
- (18) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 p180
- (19) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 p183
- (20) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 p171
- (21) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 pp186-187
- (22) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 pp186-187
- (23) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 p187
- (24) 土井忠夫、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』岩波書店1995年11月「序言」p4
- (25) 土井忠夫、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』前掲「冒頭」
- (26) 土井忠夫、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』前掲「解題」pp11-12
- (27) 土井忠夫、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』前掲「解題」p12
- (28) 土井忠夫、森田武、長南実編訳『邦訳日葡辞書』前掲「解題」pp12-13
- (29) 刘小珊《明中后期中日葡外交使者陆若汉研究》暨南大学中国古代史2006年博士論文 p207
- (30) 五野井隆史『キリシタンの文化』前掲 p190
- (31) 馬場良二『Joao Rodrigues「ARTE GRAVDE」の成立と分析』風間書房2015年1月 p28
- (32) 青木志穂子「ジョアン・ロドリゲスの日本語敬語観」p187 <http://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/handle/2324/2016.1.7> 閲覧)
- (33) マヌエラ・アルヴェレス、ジョゼ・アルヴェレス『ポルトガル日本交流史』彩流社1992年5月 pp49-50、刘小珊《明中后期中日葡外交使者陆若汉研究》前掲 p272
- (34) 松田毅一『日本巡察記』前掲 p26
- (35) 岡田袈装男『江戸異言語接触』笠間書院2009年9月 pp15-16
- (36) 村田昌巳「ヴァリニャーノと日本語」『サレジオ工業高等専門学校研究紀要』(40) 2013年3月 p19
- (37) 松田毅一『日本巡察記』前掲 p85、p93
- (38) 村田昌巳「ヴァリニャーノと日本語」前掲 p22
- (39) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp85-88
- (40) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp88-91

- (41) 森脇優紀「キリシタン『同宿』論」『上智史学』(51) 2006年11月 p246
- (42) 森脇優紀「キリシタン『同宿』論」前掲 p246
- (43) 森脇優紀「キリシタン『同宿』論」前掲 p246
- (44) 菊池武「道心と同宿」『印度学仏教学研究』第40巻第2号1992年3月 p810
- (45) 森脇優紀「キリシタン『同宿』論」前掲 pp246-247
- (46) 狭間芳樹「A・ヴァリニャーノによる佛教語使用の企図」「京都大学学術情報リポジトリ紅」2015年3月 p45 <http://dx.doi.org/10.14989/197477> 2016.12.24 閲覧)
- (47) 狭間芳樹「A・ヴァリニャーノによる佛教語使用の企図」前掲 pp46-47
- (48) 狭間芳樹「A・ヴァリニャーノによる佛教語使用の企図」前掲 p47
- (49) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp91-96
- (50) 松田毅一『日本巡察記』前掲 pp100-104
- (51) 高井喜成「キリシタン布教活動についての一考察」前掲 pp82-83
- (52) 高井喜成「キリシタン布教活動についての一考察」前掲 p87
- (53) 高井喜成「キリシタン布教活動についての一考察」前掲 p88
- (54) 高瀬弘一郎『キリシタン時代の文化と諸相』八木書店2001年6月 pp175-178
- (55) 池田大作、杜維明『対話の文明』第三文明社2007年1月 p301
- (56) 池田大作、杜維明『対話の文明』前掲 pp141-142、池田大作、マジット・テヘラニアン『二十一世紀への選択』潮出版社2000年10月 pp351-352
- (57) 池田大作、杜維明『対話の文明』前掲 pp141-142
- (58) 池田大作、杜維明『対話の文明』前掲 p140
- (59) 池田大作『「人間主義」の限りなき地平』第三文明社2008年3月 pp32-33
- (60) 池田大作『「人間主義」の限りなき地平』前掲 pp33-35
- (61) 池田大作『新・人間革命(1巻)』聖教新聞社2003年7月 pp182-183
- (62) 池田大作、杜維明『対話の文明』前掲 p154